



2010年9月6日

法政大学総長 増田壽男 様

社団法人 日本建築家協会 (JIA)  
関東甲信越支部 支部長 上浪 寛  
同 保存問題委員会 委員長 和田 昇三  
同 千代田地域会 代表 赤城 忍

### 法政大学55年・58年館校舎の保存・活用に関する要望書

拝啓 貴大学におかれましては、日頃より文化の発展と継承に深く理解を示されていることに、心より敬意を表します。

当協会は、建築設計・監理を専業とする建築家の日本で唯一の職能団体として、建築物を創ることばかりでなく、優れた建築物を保存活用し、後世に文化として継承することも創造行為の一つであるとの認識の下、望ましい建築・都市環境の形成に向け、様々な活動をしているところです。

さて、この度同窓会誌等により、貴大学市ヶ谷キャンパスにある「55年・58年館校舎」の改築計画が進んでいると知り、大変驚いています。

建築家・大江宏の設計によるこれらの校舎は、解体された53年館と共に日本建築学会賞、文部大臣芸術選奨、建築業協会 BCS 賞を受賞するなど、建築界から高く評価され、モダニズム建築の代表作として広く知られています。

大江の作品歴においても、普連土学園校舎（1968）、香川県立丸亀高等学校武道館（1973）日本芸術院賞、毎日芸術賞、国立能楽堂（1983）などと共に彼の主要作品として位置付けられております。

大江宏は1950年に法政大学工学部の教授となり、同時期に総長に就任した経済学者・大内兵衛との信頼関係の中で、貴大学建築学科の礎を築くと共に、貴大学校舎53年館（解体）、55年・58年館の設計を依頼されたと言われております。大江はその信頼に応えるべく、リズム感のある黒いスチールサッシュと全面ガラス、打ち放しコンクリートといった近代的素材を使った（当時のいわゆる）インターナショナルスタイルでこれらの外観をデザインし、法政大学の目指す自由で開かれた校風を表現しました。

また55年館の建設中に外遊を経験した大江は、その建築観の変化を58年館の設計に取り入れ、南禅寺の伽藍をモチーフにしているとも言われる学生ホールのデザインや、野太な印象を与えるコンクリートの表現など、「インターナショナルスタイル」とは異なる要素を導入し、さらに学生ホールを中心に据えなおした空間構成により、これを自身の転換点を示す作品としています。

平面計画においては、外堀に面した通りより始まるなだらかな斜路の先に外堀を望むピロティを設け、その奥に高い吹抜けを持つ学生ホールを配置し、東西に延びる教室棟と直交した低層棟としました。この学生ホールから、現在大内庭園として親しまれている庭園に連続する空間は、大江の言うところの「学生も、先生も、すべての人々を含めたコミュニティー」を入れる空間として、現在も充分活かされており、そのデザインは色あせることがありません。

55年・58年館校舎は、このように50年の時を越えて今なお現在に大きな示唆を与え続け、在校生、卒業生の心のよりどころとなっているばかりでなく、緑豊かな外濠景観との調和も保たれ、広く市民からも親しまれているところです。

昨今スクラップアンドビルドの風潮が見直され、既存の建物を保存活用する例も増えて参りました。特に教育機関である貴大学におかれましては、そのリーダーシップとなるべき道を是非とも示して頂きたく、今後の計画においては、大江宏設計によるこれら校舎を貴校のかけがえのない建学のシンボルとし保存した上で、現代的な設備を施す等、これを再生して頂きますよう、ここにお願い申し上げます。

なお、社団法人日本建築家協会関東甲信越支部、同 保存問題委員会、同 千代田地域会は、法政大学55年・58年館校舎の保存活用について、出来る限りの協力をさせて頂く所存である事を申し添えます。

敬具